



## 馬耳東風

私は育った土地柄から様々なお遍路さんのことを聞かされて来たが、なかでもらい患者の悲惨な様子は子供心にも焼き付けられている。10年程前、国立ハンセン病資料館というのが開館したということを新聞で知り訪れたいと考えていたが、過日実現した。この資料館は、らい予防法が廃止（1996）される3年前の1993年、ハンセン病患者や回復者が生きた証を残し、不当な差別が繰り返されることのないよう社会に訴えることを目的に、「高松宮記念ハンセン病資料館」として設立されたそうである。その後、らい予防法違憲国家賠償請求訴訟で原告が勝訴した際（2001）、国は控訴せず、「ハンセン病問題の早期かつ全面的解決に向けた内閣総理大臣談話」を発表した。その中に「ハンセン病資料館の充実」があったことから、リニューアルされて2007年、「国立ハンセン病資料館」（東京都東村山市）となったという。

ハンセン病は、かつては業病として恐れられ、わが国では1907年、「癩予防ニ関スル件」が制定されてより、各地を放浪する「浮浪らい」と呼ばれた人達の収容が始まった。私が子供の頃聞かされたらいに雇ったお遍路さんはこの浮浪らいに他ならない。この法律は、「癩予防法（1931）」さらに「らい予防法（1953）」となり、各地に国立の療養所が建設されて患者の強制隔離が進められ、療養所内の患者同士の結婚に際しては不妊手術が強制された。患者は肉親から戸籍を抹消され、死してなお肉親にも受け入れられなかったという。それは、『…尾田のすぐ左の男は摺子木すりこぎのように先の丸まった手をだらりと寝台から垂らしてい、その向かいは若い女で、仰向いている貌は無数の結節で荒れ果てていた。頭髮も殆ど抜け散って、後頭部に……』（北條民雄：「いのちの初夜」）

と表現されるような人間としての尊厳を貶めるような症状の故であったことは疑いようがない。治療法がなかった時代、患者は長い年月を経てそのように重篤化していくに任せるほかなかったのである。

1947年より「プロミン」による治療が開始され、治療への道が開かれ、現在では、後継薬の多剤併用療法が実施されて、以前のように重篤化することはなくなっている。また、現在わが国の新たな患者は毎年0～数名で、そのほとんどが60歳以上で、乳幼児期感染によるものという。しかし、2017年5月1日現在、全国に13あるハンセン病療養所には今なお1,468名の入所者がおり、そのほとんどが治療しているが、後遺症や高齢化のため療養所にとどまっている。

コルカタ（カルカッタ）のスラム街で貧しい人々のために活動したマザー・テレサは、ハンセン病患者の介護にも携わったが、彼女は、『100万ドルもらっても、ハンセン病患者には触りたくない』と言った人に対して、『私も同じです。お金のためだったら、200万ドルやると言われても、今の仕事はしません。しかし神への愛のためなら喜んでします』と答えたという。いかにもカトリック教会の修道女らしいが、翻ってわが国の療養施設で、膿で汚れた包帯を洗濯し、またそれ以上に危険な介護仕事をしていた職員達は、何をよりどころにしていたのだろうか。感染性のきわめて低いことを熟知している医師はともかくとして、専門的知識をもっておらず、またマザー・テレサのように何らかの深い信仰に支えられていたということもなかったと推測される人達が何故そのような仕事に従事できたのか、深い、深い、尊敬の念を抱かずにはいられない。多くを教えられた資料館だが、このような職員に関する情報が殆ど見当たらなかったことが惜まれる。（久）